

☆年間第16主日(7月23日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (知恵の書 12章 13, 16-19 節)

主よ、すべてに心を配る神はあなた以外におられない。
だから、不正な裁きはしなかったと、
証言なさる必要はない。
あなたの力は正義の源、
あなたは万物を支配することによって、
あなたの全き権能を信じない者に
あなたは御力を示され、
知りつつ挑む者の高慢をとがめられる。
力を駆使されるあなたは、寛容をもって裁き、
大いなる慈悲をもってわたしたちを治められる。
力を用いるのはいつでもお望みのまま。
神に従う人は人間への愛を持つべきことを、
あなたはこれらの業を通して御民に教えられた。
こうして御民に希望を抱かせ、
罪からの回心をお与えになった。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 8章 26-27 節)

皆さん、霊は弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちは
どう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをも
って執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが
何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者
たちのために執り成してくださるからです。

福音朗読 (マタイによる福音書 13章 24-43節)

そのとき、イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』」

イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」

また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「わたしは口を開いてたとえを用い、天地創造の時から隠されていたことを告げる。」

それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちがそばに寄って来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。イエスはお答えになった。「良い種を蒔く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者ども

を自分の国から集めさせ、燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣きわめいて齒ぎしりするだろう。そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

いよいよ東京も梅雨が明け、夏本番の日々を迎えました。暑い夏の間、特に熱中症に注意しながらお過ごしいただきたいと思います。今日の日曜日には「祖父母と高齢者のための世界祈願日」が定められています。祖父母やご高齢の方を思い起こして、今日の祈りの中祈りましょう。

さて今日のミサの朗読(神のみ言葉)は何を私たちに語り掛けてくださっているのでしょうか。朗読を聞きながら(読むのではなく)黙想してみましよう。

第一朗読 (知恵の書 12章 13, 16-19 節)

朗読の解説には「紀元前一世紀ごろに書かれた知恵の書は、旧約時代の様々な出来事を通して働いた神の知恵について思い巡らす」と言っています。「すべてに心を配られる神」、「すべてを愛おしむ方」、「大いなる慈悲をもって私たちを治められる方」は「神に従う人は人間への愛をもつべきことを教えられた」のです。創世記の初めに神は「我々に似せて人を造ろう」とされたとあります。つまり人間の在り方は「神に似る」「神に倣う」ことにあるのではないのでしょうか。そしてその在り方はイエス・キリストにおいて完全な形で私たちに示されているのです。それは人間に対する慈しみであり、隣人愛です。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 8章 26-27 節)

パウロは私たちに聖霊の働きについて述べています。聖霊は私たちを助けてくださる方なのです。私たちは祈ろうとするときに、何をどう祈ったらよいのかわからない時があります。その時の様子をパウロは「言葉に表せないうめき」と表現していますが、まさに私たちの祈りは「うめき」同然なのです。聖霊はこのうめきの祈りを父である神に取り次ぎ、取りなして下さって

おられるのです。つまり、私たちには強い味方の聖霊がおられ、私たちは安心して父なる神に近づき、心のうめきを申し述べる事ができるのです。勇気をもって心強く祈りましょう。

福音朗読 (マタイによる福音書 13章 24-43節)

イエスの話される「たとえ話」には植物の生長の話がよく出てきます。きっとイエスが宣教活動される前に毎年繰り返された種まきと収穫の作業が頭に焼き付いておられたのでしょう。今と違い当時の多くの人々にはよくわかる「たとえ話」であったのではないのでしょうか。良い種をまいたはずなのにどうして毒麦が混じっていたのか、だれにもわかりません。イエスは「敵」の仕業だ、と言われていています。私たち人間は神から創造されて、「良い」と言われたはずなのに、私たちの心には悪魔が毒麦をまいているのです。話の中で僕(しもべ)たちが「行って毒麦を抜き集めておきましょうか」と尋ねたのに対し主人は、「両方とも育つままにしておきなさい」と言われます。それは毒麦を抜くときに、よい麦を痛めてしまうかもしれない」という配慮からのようです。ここには今日の第一朗読の「寛容をもって裁き、慈悲をもって私たちを治められるという神の知恵が隠されているように思われます。「神に従う人は人間への愛を持つべき」ことをみ民に教えられたのです。



天狗の庭のイワカガミ (2022年8月 火打山)

P.S.

長年、足立教会に在籍され教会委員長などを務められた和田位さまが、一身上の都合により大森教会に転籍されることになりました。大森教会に行かれてもお元気でお過ごしいただきたいと願っています。ありがとうございました。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光